

脚気に対する隔物灸

上田 善信

日本鍼灸研究会

はじめに「脚気」という病名は『肘後備急方』巻三・治風毒脚弱痺滿上気方第二十一に「脚気之病、先起嶺南、稍来江東」とあるのが初出である。『諸病源候論』卷之十三・脚気病候・脚気緩弱候に「以其病從脚起、故名脚気」とあり、『千金方』『外台秘要方』にも同様な記載があって呼称の由来となっている。また「脚気」の別称として『千金方』に「蹶」「緩風」「脚弱」等が見える。「風毒」「瘴氣」「腎虛」など様々な病因に対応するように症状も多様で、重篤の場合には「衝心」となり死に至る、とある。

山下政三は『脚気の歴史』の中で、中国の脚気の歴史について、「脚気の起原は晋の初期ないしはその少し前」であり、唐代に「中国全土で広く流行」し、北宋になり「年と共に流行が衰え、そのために脚気を見知らぬ医師の出現によって、脚気病の概念が乱れる」ようになり、北宋後期～南宋においてはついに「脚気の流行は見られず、種々の腰脚痛、関節疾患が脚気と診断される」に至り、元代では「真の脚気はほとんどなく」、明代には「局地的・散発的な流行を示し」、清代になると「脚気の流行はほとんどなく、海浜地域で若干の軽症の脚気が見られた」と述べている。

灸治の概要 「脚気」の病因・症状や治療法一般については、『千金方』巻七・風毒脚気に詳しく論述されており、その説が後世の医書に引用され一般的なものとなった。鍼灸を用いた治療としては、『千金方』巻七・風毒脚気・論灸法に「風市、伏兔、犢鼻、膝眼、三里、上廉、下廉、絶骨」の八穴を用いた灸法があり、これが後の『千金翼方』巻二十六、『聖濟總録』巻一百九十三、『鍼灸資生経』巻五、あるいは脚気の専門書である宋・董汲の『脚気治法総要』巻上などに引用され、「脚気八処灸法」と呼ばれる代表的な治法となった。さらに南宋代になると脚気八処灸法以外の灸法も用いられるようになったが、元代までは灸法が中心であり、鍼法は殆ど見られない。明代になるとようやく隔物灸や鍼法を用いることが多くなる。

隔物灸の内容 隔物灸には二種の薬剤（附子、大蒜）が介在物として用いられるが、とりわけ附子を用いる施灸法が特徴的である。脚気に対する隔附子灸では湧泉穴を使用する。『金匱鉤玄』巻二・脚気の「有脚気衝心者、宜四物湯加炒柏、再宜湧泉穴用附子津拌貼、以艾灸泄引熱下」が初出であるが、これは脚気治療における湧泉穴への敷薬の応用であろう。敷薬の例は例えば『仁齋直指方論』巻十五・火證方論に「又云、氣從臍下起者、陰火也。氣從脚下起入腹如火者、乃虛之極也。蓋火起於九泉之下、多死。一法、用附子末、津調塞湧泉穴、以四物湯加降火藥服之妙」とあるのがそれにあたる。施灸法の詳しい説明は見られないが、他疾患の施灸法を見ると「作餅子如錢大、……灸令微熱、不可使痛」とあるから、脚気への施灸においても如錢大の餅子を用い、痛まない程度の微熱を以て熱を引き下ろすことを度としたと推定される。

もう一法の隔蒜灸は、『万病回春』巻五・脚気に「治兩脚俱是疔瘡、腫毒骨痛、用独蒜切片、鋪放患處、每處一片、用艾灸二壯、去蒜再換再灸、至愈」とあるように、蒜片を用い、壯数も少なく、他の隔物灸同様に患部に用いる。

結語 脚気に対する隔物灸は湧泉穴の敷薬を応用した灸法で、元代の『金匱鉤玄』巻二に附子餅を用いたのが始まりであり、以降の『丹溪心法』巻三、『医学正伝』巻四などもほぼ同文の記載が見られる。明代後半になり患部に隔蒜灸を用いる場合も出てきたが、湧泉穴の隔附子灸が中心的な施灸法であることは変わらなかった。